

# 文様と造形

—津島岡大遺跡の縄文土器—

今からおよそ1万5、6千年前に出現した縄文土器は、その後約1万年以上にわたって作り続けられます。この悠久の時の流れのなか、縄文人は繰り返し土器の形や文様を変化させ、複雑に入り組んだ突起をつけたり、整美な文様を描く土器をうみだしました。その造形の奇抜さや文様の美しさは、見るものをひきつけてやみません。

しかし、独創的にみえる縄文土器の造形や文様も、ある期間、一定の地域のまとまりのなかで形づくられたものであり、その特徴によって土器のつくられた時期や使われた地域を知ることができる手がかりにもなります。

今回は津島岡大遺跡から出土した縄文時代後期の土器（約3500～4000年前）の文様と造形、文様のうつりかわりについてご紹介したいと思います。

（野崎貴博）



津島岡大遺跡（環境理工学部）

## さまざまな種類

縄文土器には深鉢、鉢、浅鉢、壺、注口土器などの種類があります。そのうち、深鉢、浅鉢が大半を占め、日常的に使われた道具であることがうかがわれます。一方、壺や注口土器の出土は稀少です。特別な場面で用いられたのでしょうか。

これらの土器について、作り方という観点からみると、土器の表面を丁寧になでたり磨いたりして調整した「精製土器」と、貝殻や板状の工具の痕をのこしたあらい仕上げの「粗製土器」に大きく分けられます。文様の有無からは、「有文土器」と「無文土器」に分類されます。一般的に文様をもつ有文土器は丁寧なつくりが多く、精製土器に含まれます。

縄文土器は目的や用途に応じてさまざまにつくり分けられていました。



縄文時代後期初頭～中葉の縄文土器

前列左端 (工学部6号館)  
右側3点 (大学院自然科学研究科)  
その他 (環境理工学部)

## 造形

津島岡大遺跡からも立体的な突起をつけた装飾性の高い深鉢や浅鉢などが出土しています。なかでも注口土器の把手部分は薄く精巧につくられており、縄文人の高度な土器製作技術をうかがいしることができます。

器壁にダイナミックに描かれた文様だけでなく、複雑で精巧なかたちをつくりだす縄文土器の造形美も魅力のひとつといえるでしょう。



土瓶や急須のように筒状の注ぎ口をつけた土器 (環境理工学部)



さまざまなかたちの突起 (左・中: 環境理工学部、右: 新技術研究センター)



立体的に表現した渦巻文 (新技術研究センター)

## 文様を描く手法 すりけしじょうもん —磨消縄文—

縄文時代後期の土器を特徴づけるのは、「磨消縄文」という文様です。

磨消縄文を描き出す手法には次の二つがあります。

一つは、縄文を施した後に沈線で文様を描き、無文部となる場所では縄文を丁寧に磨り消す手法です。もう一つは、沈線で囲まれた区画内に縄文を施す手法で、区画の外に縄文は施されません。

沈線による区画をはさんだ縄文部と無文部の対比により、黒光りした器面のキャンバスに美しい文様が浮かびあがります。



磨消縄文によって描かれた文様 (新技術研究センター)

## 描かれた文様

縄文土器の器面には、直線と曲線を組み合わせた多様な文様を描き出されています。なかでも縄文時代後期には渦巻文をはじめとして、「円文」、「J字文」、「ハート形」などの曲線の文様が多用され、東日本から西日本の広い範囲において数百年にわたって描き続けられました。縄文人はこの曲線文様をどのような思いで描いていたのでしょうか？



渦巻文 (環境理工学部)



渦巻文を繰り返し描いた浅鉢 (環境理工学部)

## 文様のうつりかわり

後期初頭



後期前葉

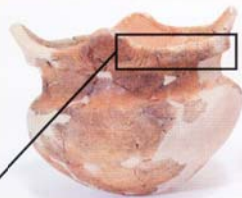


縄文土器に描かれたさまざまな文様。その基本的なかたちは長く受け継がれますが、細部では変化を重ねていきます。そのため、文様のうつりかわりを詳細にみるのが土器の新古を知る手がかりとなります。

ここでは口縁部に描かれた鋸歯文 (のこぎり刃状の山形文) を例に文様のうつりかわりをたどってみましょう。津島岡大遺跡では、縄文時代後期初頭から前葉の期間 (およそ300年間) をとおしてみられ、1~4条の沈線によって構成されています。

1条の沈線で構成される鋸歯文は、後期初頭段階の特徴をもつ土器に描かれていました。4条の沈線を一束とした鋸歯文が描かれている表紙写真の土器は後期前葉段階のもので、このことから、鋸歯文を構成する沈線は時期が下るにつれ、多条化の方向にうつりかわったと推測されます。

これらの土器では、口縁部の形や文様の描かれる位置の変化など、その他の要素も鋸歯文の変化の方向に対応しています。



考古学では、文様や突起などの造形は、時間をはかるものさしとしての役割をはたします。縄文人にとって、文様や突起はどのような役割をもっていたのでしょうか？これらの装飾が縄文人の観念を表現したものとの考えもあります。縄文人の世界観をよみとることも縄文時代研究では重要な課題の一つなのです。

※写真はいずれも土器の口縁部を上から見えています。

本調査は、共同溝部分の調査（センター報42号に報告）を終了後、2009（平成21）年9月から開始しました。面積は2482㎡です。調査した場所は、岡山大学鹿田キャンパスにある岡大病院の東西病棟北側に当たる地点です。かつては古い東西病棟と厨房が建っていた場所であったため、表土を掘削すると、大形のコンクリート基礎が林立する状態になり、遺跡は建物の建設工事によって非常に広範囲に破壊されていました。そうした状況でしたが、10月半ばから開始した発掘調査によって、室町時代～戦国時代、平安時代～鎌倉時代、そして弥生時代～古墳時代の井戸や溝などの遺構を確認することができました。

特に、これまで鹿田遺跡ではその実態が不明確であった中世後半（室町時代～戦国時代）のムラの様子を知ることができた点は大きな成果でした。幅5m前後が復元される大形の溝（濠）が約40m四方を囲む屋敷地の存在や、井戸から出土した猿をモチーフとした美濃焼の水滴などは、町並みや居住者の性格を探る手がかりになりそうです。

もう1点注目されるのは、鎌倉時代の土地区画溝の方向です。既往の調査では、鹿田遺跡に残る溝の多くは、現在の地割り（南北軸方向が東に15度前後傾く）に近い方向を示しています。ところが、本調査では、一部にその方向とは異なり、真北に近い軸をもつ溝が検出されました。これは、鹿田遺跡よりも北側に広がる条里の方向に一致するものです。なぜそのような溝が構築されたのか、現在は謎ですが、今後、新たなことがわかってくるかもしれません。また、平安時代～戦国時代に属する22基の井戸を調査しましたが、例えば平安時代ではいずれも木組み構造をもつ3基が等間隔に配されるなど、時代



調査区全景（南から）



木組みをもつ古代の井戸

ごとに配置や構造あるいは埋没状況など様々な点で特徴を見いだすことができました。集落の変化もそこに反映されているようです。

こうした中世集落の調査成果を公開するために2010年1月23日には現地説明会を開催し、160名の見学者が来跡されました。（山本悦世）

## 編集後記

立体的な突起による装飾や、直線と曲線が組み合わされた不思議な文様の縄文土器を見ていると、ぐるぐる渦巻く文様が頭の中をグルグル巡ります。眺めているだけでもおもしろい縄文土器。埋文センターでは、ここで紹介した縄文土器の一部を展示しています。ぜひ見学にいらしてください。

（野崎）

### 編集発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

〒700-8530 岡山市北区津島中3丁目1番1号

TEL・FAX (086) 251-7290

【ホームページ】

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>